

研究ノート：マイケル・ブラットマンの共同行為論

片岡 雅知¹

複数の人間が「一緒に何かする」というべき独特な種類の行為はしばしば、「共同行為」(joint action)と呼ばれる。小規模なものから言えば、人は一緒に散歩したり、一緒にテレビゲームをしたり、一緒に楽器を演奏したりする。あるいはより規模が大きくなれば、組織や会社の行為が語られることもある。マイケル・ブラットマンは大変明晰かつ包括的に共同行為に関する理論を構築しており、彼の諸業績は哲学においても経験科学においても非常によく引用される。こうした状況のもと、本ノートはブラットマンの共同行為論の包括的なサーベイを行うものである²。

1 共同行為と関連する4つの条件

ブラットマンが共同行為について語るときによく出す具体例は、「2人で家をペンキで塗る」「2人でニューヨークへ行く」「デュエットする」などである。このような共同行為の本性が何だと考えられているのかは、次の引用にうまく要約されている。

共有された意図的活動とは、その基本的な事例においては、共有意図およびそれに関連する形の相互の応答性によって説明するのが適切な活動のことである。共有された友好的活動は、さらに、ある種の強制がないことや、共同活動を追求するにあたって相互に援助を行うことへのコミットメントが必要になる (Bratman, 1997b, p. 142)³。
ここからはブラットマンが「共同行為」と「友好的な共同行為」を区別していること、共同行為や友好的な共同行為が以下のような条件によって区別されていることが見て取れる。

(A) 相互の応答性 (mutual responsiveness)

これは、共同行為の参加者が、互いに互いを意図的行為者だと理解し、相手の意図や行為に反応しているということである。さらにブラットマンによれば、これは次の

(B) を介して成立するとされる。

(B) 共有意図 (shared intention)

(C) 相互の援助へのコミットメント

これは、共同行為の参加者が、その共同行為遂行に関する限りで相手に支障が生じた場合に、それを援助することにコミットメントしているということである

(D) ある種の強制の不在

「ある種の強制」とは、(A) を考慮すれば、相手を意図的行為者としてあつかいつつ

の同時に強制することだと考えられる。例えば脅迫などがあてはまるだろう (Bratman, 1992, p. 102)。

さらにブラットマンが挙げる具体例を参照すると、これらの条件とそこにおいて成立する行為の種類との間の関係は次のようにまとめられる (Bratman, 1992)

行為の例	成立している条件	行為の種類
人を誘拐して縛ってトランクにぶち込んでニューヨークまで行く	×	共同行為ではない
二人の兵士が戦場で戦う	(A)	共同行為ではない
－ (B) を介して (A) が実現されることが求められているため、(B) 単独で成立しているような場合は無い)	(B)	－
人を銃で脅して助手席に座らせてニューヨークまで行く	(A) (B)	共同行為
－ (ブラットマンによる明言なし)	(A) (B) (C)	共同行為
二人で合奏するが、もし相手が音を外したときにフォローする気は毛頭ない	(A) (B) (D)	共同行為
二人で合奏する	(A) (B) (C) (D)	友好的な共同行為

(A) (C) (D) の各条件が何を言っているかは直観的によく分かるだろう。ブラットマンにとって共同行為とはあくまで (A) 相互の応答性と (B) 共有意図によって特徴付けられるものである。(C) 相互の援助がなかったり、(D) 一種の強制があったりしても、それは行為の共同性を損ねるものではない。

では、(B) の共有意図とは何なのだろうか？ 共有意図とは何かを明らかにすることが彼にとっての中心的課題となる。

2 共有意図の「構成主義」

共有意図とは何か、あるいはもう少し自然な日本語で言うと、「意図を共有する」とはど

うということなのか。この問題に取り組む際、ブラットマンは「構成主義」という立場を取る (Bratman, 2009a, pp. 43-46) ⁴。構成主義とは、以下のような3つのアイデアからなる方法である ⁵。

アイデア1：個人の心的状態に関する素朴心理学的機能主義

まずブラットマンは、個々人の持つ心的状態を理解するには、その状態の持つ機能と、そこに関連した規範性を特定することが重要であると考えている。とくにブラットマンはこうした観点から意図概念の分析を行い、意図に関する優れた理論である「計画理論」を唱えるに至っている。ブラットマン自身が述べるように、こうしたブラットマンの方針は機能主義の伝統のうちにあるといえる (ブラットマン, 1994, p. 16)。

アイデア2：共有意図の機能の特定

つづいてブラットマンは個人の意図に対して用いられた手法を、そのまま共有意図にも用いることを提案する。まず共有意図の機能とそこに関連する規範性を特定しようと言うのである。すなわち、人は「いったい何のために」意図を共有するのか。ブラットマンはその答えとして3つを挙げる (Bratman, 1993, p. 112 も見よ)。

共同の目的達成へむけて

- (I) 参加者の行為の調節を助ける
- (II) 参加者の意図の調節を助ける
- (III) 参加者間の交渉の枠組みを与える

アイデア3：共有意図の実装の特定

最後の提案は、個人の意図と共有意図の関係に関するものである。ブラットマンによれば、共有意図の機能をはたすのは、参加者が持つ関連する意図とその相互の関係である。すなわち、ブラットマンによれば共有意図とは「個々の関係者の適切な態度と、それらの態度の相互連関から主として構成されたひとつの事態」である (Bratman, 1993, p. 107)。これは、関連する個人の意図とその適切な組み合わせによって共有意図の機能が実現されるという主張であると理解できる。

ここで注意しなくてはならないのが多重実現可能性である。全ての機能的に特定された性質と同じく、ブラットマンの言うところの共有意図も多重実現を許す。すなわち、以下で見るブラットマンの提案以外の仕方でも共有意図が実現されると考える可能性は常に開かれていたということだ。

以上からわかるように、ブラットマンは大筋で機能主義的な方法論によって、共有意図の本性へアプローチしようとしていると言えるだろう。

3 共有意図とSI テーゼ

では、具体的にどのような個人の態度とその組み合わせによって、共有意図が実現されるとされるのだろうか。細かい疑問点は次節以降に回すとして、まずブラットマンがどのような考察を経てその実質にたどり着くのかを順を追ってみていこう。ブラットマンは大きく4つの考察を行う。

3. 1 【段階1】ふたりで意図する

例えば、2人で合奏を行おうという意図が共有されていると言えるような状況を考えよう。これが成立しているためには、当然、参加者の各々がその合奏を意図していなくてはならないだろう。一般化して言えば、Jする意図が共有されているならば、参加者はそれぞれ<われわれがJすること>を意図している必要があるだろう。すなわち、まず次のような意図が必要になるだろう。

- (1) (a) 私は<われわれがJすること>を意図している
(b) あなたは<われわれがJすること>を意図している

しかしここで登場する意図には理論的な問題があるようにおもわれる。というのも、そもそもブラットマンは共有意図によって共同行為を定義しようとしていたのだった。しかし(1)の意図の内容になっている<われわれのJ>なる概念は何なのだろうか。これが共同行為概念であれば、共同行為を定義しようとして共同行為概念を用いるという悪循環が生じている、とブラットマンは考える (Bratman, 1993, p. 101; 2009a, pp. 46-47)。

この循環を回避すべくブラットマンは、「共同中立的」な行為概念と「共同負荷的」な行為概念を分けるように提案した。例をあげれば、<われわれが壁をペンキで塗る>という概念は、<2人の人物が共同でペンキを塗ること>として理解することもできるが、<2人の人物が各々、衝突しない様に、ペンキで塗ること>としても理解できる。前者では「2人」というのがまさに行為者の単位になっているが、後者ではそうではなく、2人の行為者の行為が一定の仕方（衝突しないような仕方）で特定されているにすぎない。前者が共同負荷的な概念、後者が共同中立的な概念である。そして、(1)の意図の内容は共同中立的な概念になる、というのが、循環の懸念に対するブラットマンの回答である。

つまり、(1)の意図それ自体には決して共同的な要素は含まれない。以下で見ていく他の要素によって、共同行為の共同性は担保されるのである⁶。

3. 2 【段階2】共有知識

各々が勝手に<われわれが合奏すること>を意図してはいるが、互いの意図の存在には気がついていない場合を考えよう。このようなケースでは（まだ）意図の共有が達成され

ているとはいいたいだろう。関連する意図は関係者の間でオープンになっていると考えていいだろう。そこで、

(6)⁷ (1) がわれわれの間で共有知識になっている。

3. 3 【段階3】相手の意図を無視しない

ここで例えば、〈われわれがニューヨークへ行く〉という内容の意図に関して(1)(6)が成り立つとしよう。しかし、私はあなたの意図とは関係なく、あなたを誘拐して縛ってトランクにぶち込んでニューヨークまで行くという意味で〈われわれがニューヨークへ行くこと〉を意図していたとする。しかしこのとき、私はあなたを「意図をもつ行為の主体」としてみなしていない。これでは道具をつかって行為しようとしているのと変わらない⁸。

このような場合も、二人が意図を共有しているとはいいたいだろう。だから、私はあなたを意図的な主体として考え、あなたの意図がわれわれの行為に対して有効に働きかけていると考える必要がある。以上の考察から、真の共有意図のためには、私はただ〈われわれがJすること〉を意図しているだけではだめで、〈あなたがJという意図を持っているがゆえにわれわれはJすること〉をも意図していなくてはならないことがわかる。そこでさらに次の条件が必要である。

(2) 私は、〈(1)(b) ゆえに、われわれがJすること〉を意図している
あなたは、〈(1)(a) ゆえに、われわれがJすること〉を意図している⁹

3. 4 【段階4】下位計画の噛み合い

ところで、上で少し触れたブラットマンの意図の「計画理論」の核心は意図を「計画」のようなものと理解する点にある。計画は、大きな計画の下により小さな計画が立てられるという階層構造をなしている。旅行に行くという意図を大きな計画として捉えるならば、例えばチケットを買うことや、荷物を準備することが下位計画になるだろう。そして、大きな計画の達成には、下位計画のそれぞれが上手く整合する事が求められる。

では、共同行為の場合下位計画はどうなるだろうか。例えば、われわれは(1)(2)(6)を満たす仕方で散歩に行くことを意図しているのだが、私はわれわれが近所の公園までいくことを下位計画としており、あなたは正反対の方向にある河原に行くことを下位計画としており、しかもどちらも全く譲る気がないといった状況を考えよう。こうした状況では、意図が共有されているとはいいたいだろう。

ただし他方で、2人の下位計画の内容が完全に一致していなければ意図の共有ができないということもないだろう。問題なのは、互いの下位計画が相互に矛盾しない事、すなわち下位計画の「噛み合い」である。ブラットマンはこの「噛みあい」という概念を次のよ

うに定義する。

＜われわれがJすること＞に関する個々人の下位計画が噛み合っている iff
われわれのどの下位計画も侵さず、かえってそれらの下位計画を成功裏に遂行できるよ
うな、Jの行い方が存在する (Bratman, 1993, p. 120)

また、下位計画は共有意図を抱こうとする際に＜既に＞全て噛み合っていなければなら
ないわけではない。ふつう細かい調節は意図を共有した＜後に＞こそ行われるのであり、
噛み合わせようとする意図があれば十分だといえるだろう。

以上の考察から、共有意図が成立するためには、私はただ＜われわれがJすること＞を
意図しているだけではだめで、＜下位計画を噛み合わせるような仕方であれわれがJする
こと＞をも意図していなくてはならないことがわかる。そこで次の条件が加えられる。

- (3) 私は＜(1)(a)(b)の噛み合う下位計画にあわせてわれわれがJすること＞
を意図している
あなたは＜(1)(a)(b)の噛み合う下位計画にあわせてわれわれがJするこ
と＞を意図している

3. 5 SI テーゼ

最後に共有知識の範囲を広げてやって、共有意図はひとまず次のように定義される

【SI テーゼ】

われわれがJを意図している if

- (1) (a) 私は＜われわれがJすること＞を意図している
(b) あなたは＜われわれがJすること＞を意図している
(2) 私は、＜(1)(b) ゆえに、われわれがJすること＞を意図している
あなたは、＜(1)(a) ゆえに、われわれがJすること＞を意図している
(3) 私は＜(1)(a)(b)の噛み合う下位計画にあわせてわれわれがJすること＞を
意図している
あなたは＜(1)(a)(b)の噛み合う下位計画にあわせてわれわれがJすること
＞を意図している
(6) (1)(2)(3)がわれわれの間で共有知識になっている

これが、ブラットマンがまず提出したテーゼである¹⁰。

4 「自分の行為条件」

SI テーゼに対する疑問点にうつろう。共同中立的な内容をもつとはいえ、(1) の意図にはさらに概念的問題がありそうにも思われる。というのも、あえて直観的に言うと、「私がわれわれの行為を意図する事は出来ないのではないのか」と思われるからだ。この漠然とした疑念からは、その明確化の仕方に応じて、いくつかの主張を引き出す事が出来る。そしてブラットマンはそのそれぞれに Bratman (1997b), (2009a) で応答し、この過程で上述の SI テーゼには若干の修正が加えられることになる。

まずこの疑念は、「私の意図の内容となるのは私の行為だけではないのか」という形で明確化することができる。これは Stoutland (1997) や Searle (1990) に見出せる疑念である。ブラットマンは意図の内容に関するこの制約を「自分の行為条件」と名付けている (Bratman, 1997b, p. 148)。

しかし「自分の行為条件」に対処することは簡単である¹¹。たしかに、意図には、自分の行為に直接結びついているものもあるだろうし、そういう意図が無ければ実際に行為はおこなわれまいだろう。しかし、計画という観点から理解できる未来志向的な意図も確かに存在しているというのがブラットマンの「計画理論」の核心であった。そして確かに、「他人が騙される事」を意図するとか、「部屋がきれいになる事」を意図することが不可能だと考えることは出来ないだろう。しかしこの場合、意図の内容には自分の行為は入っていないのである (Bratman, 1993, p.97)。というわけで、「自分の行為条件」は完全に間違っている訳ではないが、一定程度下位の意図に対してしか適用されないと考えるべきである。そして (1) が要求するのはより高次の未来志向的な意図なのだから、(共同中立的な) 概念を内容にとることが十分できるのである¹²。

5 「制御条件」

しかし元々の疑念は別の仕方でも明確化する事も出来る。まず、「自分自身が制御できない」と思っている事を意図する事はできない¹³、という条件で意図の内容を条件付けることは尤もらしい。例えば、地震が来ないように意図することがつまりどういうことなのかを理解するのは殆ど不可能だろう。この条件をブラットマンは「制御条件」と呼ぶ。この「制御」という概念は明確化するのが難しいが、ブラットマンの理解では、ここには少なくとも2つの要素が関わっている (Bratman, 2009a, p.52)。すなわち、

(A) 私が X を意図する時、私はその意図によって X が実現するだろうと (正しく) 信じている。

(B) かつ、私はその意図がなければ X は実現しないだろうと信じている。

そしてこの考えを踏まえると、(1)の意図には再び疑問がわいてくる。つまり、ブラットマンは既に意図の内容に共同中立的な概念が入るとしたが、このとき、この内容には他人の行為が含まれている。しかしどうやったら、自分が意図を持つ事によって他人の行為が実現したりしなかったりすると信じる事が出来るのだろうか？これがBaier (1997)がブラットマンに投げかけた疑問であった。

しかしここで注意したいのだが、ここにはもう1つ、関連するが微妙に異なる問題がある。いま「制御条件」として問題にしたのは、(1)すなわち「個人の」持つ意図に関わる問題である。その一方で、あくまで集団を意図を持つものの単位として捉えることで、「共有意図とはわれわれが持つ意図なのだから、われわれの行為の制御は「われわれが」おこなうものでなくてはならない」という形で制御条件をとらえることもできる。この後者を、「集団-制御条件」と呼んでおこう。ブラットマンの提案にそのまま従えば、この「集団-制御条件」には次の2つのことが含まれるだろう。

(A*) われわれがXを意図する時、われわれはその意図によってXが実現するだろうと（正しく）信じている。

(B*) かつ、われわれはその意図がなければXは実現しないだろうと信じている。

これは単に(1)という個人の意図に関わる問いではなく、「共有意図」全体に関わる問題である¹³。言い換えると、この2つの条件の違いは、次の2つの疑問の違いだとも言えるだろう。すなわち、「どうしてあなたは自分で完全に制御できないことを意図できるのか？」と「どうしてあなた一人がわれわれの行為を意図できるのか？」の違いである。

私の見る限り、ブラットマンは「制御条件」の問題と「集団-制御条件」の問題を区別していない。というのも、ブラットマンは（明言はしていないのだが）、「われわれがわれわれの行為を制御できると信じている」ということは、「私がわれわれの行為を制御できると信じており、かつ、あなたもわれわれの行為を制御できると信じている（そしてこのことは共有知識になっている）」ということ（つまり「制御条件の組」）と等値だと考えているようだからである（Bratman, 2009a, p. 52）。すなわち、(A*)と(B*)が成立するとは、私とあなたそれぞれに関して(A)と(B)が成立することにほかならないのである。そしてそうだとすれば、ブラットマンの共有意図の定義が「集団-制御条件」を満たすということは、私とあなたの両方が、それぞれ(1)(a)と(1)(b)に関して「制御条件」を満たすことと同じである。だから結局問題は、同じ内容に関して2人が制御することが可能だということを示すことにある。

ではこの疑念に対するブラットマンの応答を見よう。まず、いくら意図の内容は本人が制御できるものでなくてはならないと言っても、それは、そこに他人の介入が一切入って

いてはいけないという訳ではありえないことをブラットマンは確認する。例えば、手紙が届くまでには多くの人の行為が介入しているからといって、私自身では手紙を出すことを意図することができなくなる訳では全くないだろう。介入してくる人の行為に関して信頼可能な信念があれば、このような意図を抱くことに問題はないのである。ブラットマンはこのことを、意図の制御は「条件的な介入」を許す、と表現する (Bratman, 1999a, p. 152)。

そしてブラットマンは、「制御条件」が満たされるためには、SI テーゼに加え、次の2条件が共有知識になっている必要があると述べる (Bratman, 2009a, p. 53)。ひとつめは、

(4) 私もあなたも次のことを信じている：(1) (a) と (1) (b) が存続し続ける限り、その結果として、われわれはJするだろう。

次に

(5) 私もあなたも次のことを信じている：自分の意図 ((1) (a) / (b)) の存続は、相手も対応する意図 ((1) (a) / (b)) を持っているという継続的な知識に因果的に依存している。

ここで、(5) の信念内容をブラットマンは「DEP」(意図の相互依存) と名付ける。そして (5) が信じられている状況では、普通次のことが成り立っているだろう¹⁴。

(DEP) は真である (実際にそのような相互依存関係が成立している)

(4) (5) (DEP) が成立しているというのはつまり、私が (1) (a) の意図を持つ場合そしてその時のみわれわれはJするだろうが (4)、同時に、このことは相手に関連する意図を持っていること (の信頼可能な信念) に仲介されてもいる (5) ということである。これは同じことが相手にも言える。かくして2人が不整合に至ること無く「制御条件」を満たすことができる。そして同時に「集団-制御条件」は満たされるのである。

ただし話はもう少しだけ込み入っている。ここまでの条件を見ると、(1) (a) の存続が (1) (b) の知識に依存し、同時に (1) (b) の存続は (1) (a) の知識に依存しているということが主張されている。しかしここで、どうやってこのような相互依存した意図が「獲得されるのか」という通時的な問題が生じてくる。

これに関してブラットマンは次のような説明をあたえる (Bratman, 1997b, pp. 154 - 156)。先ほど、相手の意図に関して信頼可能な信念があれば、「条件的な介入」は許されると述べたが、これには信頼可能な「予測」でも十分だろう。そしてそうだとすれば、「自

分が意図を形成すれば相手も同じように意図を形成するだろう」という予測が信頼可能な形で成立していれば、この予測に基づいて私は意図（１）（a）を形成することができるだろう。そして表出されたその意図を相手が知ること、相手も対応する意図（１）（b）を形成することになるだろう。星川（2011）の秀逸な表現を借りれば、片方が「言い出しっぺ」となってもう片方が乗る。かくして基本テーゼの構造が成立可能になるのである。

6 基本テーゼ

ここでいったんこれまでの考察を整理し、ブラットマンが共有意図に関して最終的に提示するテーゼ、「基本テーゼ」を掲げておきたい。

【基本テーゼ】

われわれがJを意図している if

- (1) (a) 私は<われわれがJすること>を意図している
(b) あなたは<われわれがJすること>を意図している
- (2) 私は、< (1) (b) ゆえに、われわれがJすること>を意図している
あなたは、< (1) (a) ゆえに、われわれがJすること>を意図している
- (3) 私は< (1) (a) (b) の噛み合う下位計画にあわせてわれわれがJすること>を意図している
あなたは< (1) (a) (b) の噛み合う下位計画にあわせてわれわれがJすること>を意図している
- (4) 私とあなたは次のことを信じている。(1) (a) と (1) (b) が存続し続ける限り、その結果として、われわれはJするだろう。
- (5) 私もあなたも次のことを信じている：自分の意図 ((1) (a) / (b)) の存続は、相手も対応する意図 ((1) (a) / (b)) を持っているという継続的な知識に因果的に依存している。
- (DEP) (1) (a) (b) の意図が実際に (5) で信じられているような仕方でも相互に依存している
- (6) (1)・(4) と (DEP) がわれわれの間で共有知識になっている¹⁵

これは極めて込み入っているが、直観的な言葉で表現するとこうなる (Bratman, 2009a, p.54)。

- (1) 共同中立的な行為への意図
- (2) (1) を互いに結合させる意図
- (3) 下位計画を噛み合わせる意図

- (4) 関連する信念が共同で効力を発揮するという信念
- (5) 意図が相互に依存しているという信念
- (DEP) 意図が相互に依存している
- (6) 以上の事に関する共有知識

かくして、共有意図とは何なのかについて一定の回答が与えられた。ここで改めて、ブラットマンにとって共同行為とは何だったかを見てみよう。それは前述のように、

- (A) 相互の応答性
- (B) 共有意図
- (C) 相互の援助へのコミットメント
- (D) ある種の強制の不在

の4条件のうち、(A) と (B) によって定義されるものだった。さらに確認すると (A) は (B) を介して実現するというのがブラットマンの最初の特徴付けであった。そして現在提出されたテーゼのもとでもこの要件はしっかり満たされている。(2) と (4) が (A) が成立しない状況を許さないからである。

ここで問題にしたいのは (C) である。ブラットマンは少なくとも Bratman (1992, 1993) の時点では、「(A) と (B) があって (C) が不在」というパターンを想定していた（最初に掲げたようにこれは共同行為である）。ところが、改めて「基本テーゼ」、特に (1) を見てみよう。(1) の意図の内容になっている「共同中立的な概念」は、私とあなたの意図的行為の一定のあり方を特定するものだとしていた。そうするとここでは、自分の意図内容の中に相手の行為が部分的に入るということが述べられていることになる。しかし、ここで同時に「(C) 必要なときに相手を援助しない」ということが可能なのだとすれば、この時私は自分の意図の内容の充足が妨げられているにもかかわらずそれに何も手を打たないということになる。これは意図という心的態度の本性に反している¹⁶。つまり、「基本テーゼ」の元では、実は、(B) が満たされていて (C) が満たされていないことは基本的にあり得ないのである (Bratman, 2009a, p.51)。

かくして「基本テーゼ」を踏まえると、共同行為のパターンは以下のように整理される。 φ の部分が最小限の共同行為である。

行為の例	成立している条件	行為の種類
人を誘拐して縛ってトランクにぶち込んでニューヨークまで行く	×	共同行為ではない

二人の兵士が戦場で戦う	(A)	共同行為ではない
Φ	(A) (B) (C)	共同行為
二人で合奏する	(A) (B) (C) (D)	友好的な共同行為

7 「裁量条件」

さて、以上をふまえた上で最後に前述の(1)に対する疑問をもう一つ別の仕方でも明確化しておきたい。ヴェルマンは意図の次のような特徴に着目する。何かを意図するということは、「自分次第」である何らかの案件に関して心を「決める」ということである。例えば今日の夕食は何を食べるかは私次第で決まるものであり、夕食という案件に関して一定の意図(計画)をもつことというのは、例えば夕食はサバにすることに決めたということである。自分次第にならないこと、例えば国の消費税を何%にするか、といった問題に関しては、私は意図を持つことができない。このように、私が意図を持つことができることは、「私次第」であること、私が裁量を持つことに限られる(Velleman, 1997, p. 35)。この条件を「裁量条件」と呼ぼう^{17 18}。

これをふまえて共有意図について考えてみよう。制御条件の場合と同じで、ここにも問題はおそらく2つある。すなわち、「どうしてあなたは自分で完全な裁量を持たないことを意図できるのか?」と「どうしてあなた一人がわれわれの行為の裁量をもてるのか?」という問題である。「われわれの行為に裁量を持てるのはわれわれである」というこの後者の条件を、例によって「集団-裁量条件」と呼んでおこう。

ブラットマンは、「制御条件」と「裁量条件」を全く同じように対処可能なものだととして扱っており、上の「基本テーゼ」によって同時に「裁量条件」も満たされていると考えている。すなわちまず、いくら意図の内容は本人次第であるものでなくてはいけないと言っても、それは、そこに他人の介入が一切入っていないといけないという訳ではないことをブラットマンは確認する(既に見た「条件的な介入」である)。続いてブラットマンは(明示的には言っていないのだが)、「制御条件」の場合と同じく、「われわれがXに関して裁量を持つこと」(集団-制御条件)とは、「私もあなたもXに関して裁量を持つこと」(裁量条件の組)であると考えている。そして上で述べた全ての条件が満たされるとき、私が意図すればあなたも意図することが信頼可能なかたちで予測できるならば、私にとってあなたの動向は既に決定済みのことであり、最終的にXが実行されるかどうかに関しては、後は私が意図するか否か次第、私の自由な決定によっているといえる。ここで同じことが相手にも言えれば、2人が不整合に至ること無く「裁量条件」を満たすことができる。そして同時に「集団-制御条件」は満たされる、と言えそうである(Bratman, 1997, pp. 156-157)。

しかしここで星川は次の点を指摘する。「裁量」というのは意図の「形成」にかかわる話であるから、意図の「存続」に関わる制御条件とは異なり、複数の主体が一つの事柄に関して同時に裁量を持つのは不可能ではないか?

ひとつの案件につき意思決定の資格が与えられる主体は一つであるということは、われわれが家を塗装すべきかどうかを決定する資格があるのかは「私であるか」、さもなければ「われわれ」であるということである。(星川 2011, p.74)

つまり、結局意図の内容は話を切り出す「言い出しっぺ」に全面的に裁量があるのではない、という批判である。

この批判の有効性は、「集団―裁量条件」とは「裁量条件の組」のことであるというブラットマンの(暗黙の)想定可否にかかっている。共有意図形成時の非対称性は、「裁量条件の組」にとっては問題にならないからである。言い出しっぺである私は、相手が乗ってくれる事を決定済みのこととし、意図を「言い出す」かどうかを自由に決定できるので、「われわれが家を塗装すること」は私次第である。従って、私が(1)(a)の意図を持つことに問題はない。一方であなたのほうも、その意図に乗じるか否かは自由であるので、「われわれが家を塗装すること」はあなた次第でもある。従ってあなたが(1)(b)の意図を持つことも問題ではない。

しかし、この想定が成立しないと考えてみよう。すると確かに、共有意図の内容は私によって提示されたものであるのだから、共有意図の内容が「われわれ」ではなく私次第になっており、これは「集団―裁量条件」に違反する。更に言うと、ここでは逆の主張をすることも出来る。すなわち、確かに(1)(a)によって共有意図の内容を提案するのは私かもしれない。しかし、それを受けてあなたが(1)(b)を形成しない限り、(1)から(6)に至る共有意図が形成されることはそもそもないのだから、意図内容を最終的に決定する裁量はあなたの方にあるとも言えるのである。もちろんこの場合も、裁量が「われわれ」にあるわけではないので「集団―裁量条件」に違反する。

では、結局このような「集団―裁量条件」理解は正しいのだろうか。まず明らかに言えることは、「集団―裁量条件」が「裁量条件」の組ではないのだとすれば、「集団―裁量条件」において裁量を持つと言われている「われわれ」というのは一体何なのかについて、批判者側は一定の説明を与えなくてはいけないということである。批判者側がこの举证責任を負っている限り、ブラットマンの主張は相手方に対して相対的に有利だと言わざるをえない。

8 まとめ：ブラットマンの「還元主義」

以上がブラットマンの共同行為論の全体像である。ブラットマンは共同行為の条件として「(A) 相互応答性」、「(B) 共有意図」の2つをまず挙げた。しかし、「(B) 共有意図」に関する実質的テーゼである「基本テーゼ」は、(A) および「(C) 相互の援助へのコミットメント」を含意するものであった。すると結局、ブラットマンの手元には、共同行為(A+B+C)と友好的な共同行為(A+B+C+D)の2つが残っており、共同行為の特徴付

けの成功は「基本テーゼ」に全面にかかっていることになる。

この「基本テーゼ」にはどのような特徴があると言えるだろうか。ここで、共同中立的な概念が(1)の意図内容として考えられていることを思い出そう。共同中立的な概念は、一定の仕方で行われる2つの個人の意図的行為を特定する。だから、(1)の意図内容には、行為者の基本「単位」としての集団を指定するような概念は含まれないというのがブラットマンの考えであった。すると、ブラットマンの見解は少なくとも次の点で「還元主義」的だといえる¹⁹。すなわち、意図の主体に関しても、その内容に関しても、集団というものをそのまま残していない点である。この還元主義という特徴は、共同中立的な概念の導入の他に、集団を意図の担い手の単位として考える時に出てくる制約である「集団-制御条件」と「集団-裁量条件」が、個人の意図の内容に関する制約である「制御条件の組」および「裁量条件の組」と等値であるとされるところにも極めてよく現れている²⁰。

(東京大学大学院総合文化研究科修士課程)

注

1 kataoka.c.masanori@gmail.com

2 本ノートはブラットマンの共同行為論の理論的部分をサーベイ対象とする。ブラットマンの理論に関しては、それがどのような規範的含意をもつかという論点があるのだが、紙幅の都合上こちらの話題は今回見送った (Bratman (1997a) および片岡 2014 の4章を参照)。

3 この引用から直ちにわかるように、ブラットマンは「共同行為」(Joint action)という言葉を使わない。不幸なことに、共同行為に関する議論では術語に全く統一がはかれていない (ブラットマンおよびその他の主要な研究者の用語系については、古田 2011, n3 & n7)。しかし本稿では議論に支障が出ないかぎり、各研究者の用いる語彙の差異は無視することにする。また古田の論文を引用したついでに付け加えておきたい論点がある。以下で筆者は共同行為や共有意図の例示にあたって、自然さを優先して文脈に応じて「私」や「あなた」、「われわれ」などの様々な人称を用いるが、本論文では人称にまつわるあらゆる哲学的問題には一切関与しない (pace 古田 2011; 壁谷 2007)。なお「共同行為を個人の命題的態度によって説明する」ことは「共同行為を一人称的視点から説明する」ことではない。

4 このように名付けられたのは Bratman (2009) においてであるが、少なくとも Bratman (1997b) の時点では、実質的に同じ方法がとられていた (ただし注8も参照)。

5 各アイデアに題目を与えたのは筆者である。

6 ここで補足的に言及しておく、ブラットマンはこの方法で循環の問題を回避できるのは「基本的な事例」「根底のレベル」に限られており、あらゆる共有意図の内容を「共同中立的」概念として理解できるとは言ってない (Bratman, 1997b, pp. 147-148)。ただしブラットマンは、何が「基本的な事例」なのかについて、「関連する意図内容が「共同中立的」なものであること」とは独立の規準を与えないので、この区分は議論の上で実質的に有効なものとはいえない。

7 ナンバリングは先を見越してある。

8 既に上の表にまとめたように、この事例はそもそも(1)[意図の]相互応答性が欠けている例とみなせる。つまり段階3でのブラットマンの考察は「共有意図は意図の相互応答性を前提する」と整理することが出来る。ブラットマンは、相互の応答可能性は「このコミットメント[共有意図]の追求を通じて」達成されると述べているが、この要件の一部がここで満たされることになるだろう (Bratman, 1992, p. 95)。

9 従ってここで挙げた<私があなたをトランクにぶち込もうとしている>状況は、(2)は無いが(1)

はある例だとみなせる。この状況に関して古田は次のような指摘を行っている。「彼[ブラットマン]は本文で取り上げる条件 (i) [(1)] を満たす意図を、この「トランクの中の人間」に帰属させている」(古田 2011, n.3)。これは誤りである。ブラットマンはここであくまで未来志向的な意図を問題としているのであるから、ここでは行為は未だ起こっていないのであって、あなたはまだ縛られてトランクの中にいるわけではない。

- 10 精確に言うと、これはブラットマンが Bratman (1993) で「SI テーゼ」と呼んだものとは次の点で異なっている。まずブラットマンはこの時点では多重実現に配慮していなかったらしく、iff での定式化を行っていた。次に、この時点では (2) と (3) が一緒にされて次のように提示されていた。

(2) 私は< (1) (a) (b) およびそれらの噛み合う下位計画にあわせてまたそれゆえに、われわれが J すること>を意図している

あなたは< (1) (a) (b) およびそれらの噛み合う下位計画にあわせてまたそれゆえに、われわれが J すること>を意図している

しかしこの定式化は、実は単に (2) と (3) を一緒にしたものではなく、とりわけ (2) に関してかなり実質的な違いがある。というのもこの定式化を整理すると、ここで私は、

- ・私は<われわれが J すること>を意図している
- ・私は<私は<われわれが J すること>を意図しているゆえに、われわれが J すること>を意図している

と記述される二つの意図を持つことになっており、ブラットマンはここで、この意図が一種の反射性を持つと言っているのである。

ただし、ブラットマンは通常の個人の意図に関して反射性を認めるものではない (cf. Searle 1983)。ここで意図の反射性を主張しなくてはならなかったのは、<参与者としての相手>の意図の有効性を考慮しなくてはいけないならば、<参与者としての私>の意図の有効性をも考慮しなくてはならないという、社会的なコンテクストからくる圧力のゆえであるとブラットマンは述べている。

しかし Bratman (2009) ではこのような複雑な見解は放棄し、本文で提示したように純粹に相手の意図の有効性のみを自分の意図に組み込むという考えに至ったようである。本文では最新の見解の方に従うことにする。

- 11 以下の対処法は Bratman (1993) p.97 以下および Bratman (2009) に負う。「自分の行為条件」という名前が出てくるのは Bratman (1997b) p. 149 なのだが、この論文ではブラットマンはこの条件を、後に述べる「制御条件」にまつわる問題と混同しているように私には思われる。
- 12 ちなみにこのことをブラットマンは、「intend to」と「intend that」の違いに訴えて説明するが、これは英語固有の事情であると思われるのでここでは触れない。
- 13 なおこの点を理解していないと片岡 (2013) pp. 95-96 のような不用意な記述をすることになる。同箇所の記述は「制御条件」は問題にしているが、「集団 - 制御条件」の存在を全く念頭においていない。
- 14 それがなぜなのか、についてブラットマンは説明を与えていないが、おそらく (5) は信念の通時的な保持の条件だという点がポイントだろう。通常の状態では、実際に内容が真でなければ信念は「存続」しない (pace 古田 2011, p.20)。
- 15 共有知識の対象から (5) が取り除かれているが、これはおそらく、DEP と (6) から (5) が導出されるのでわざわざ書かなかったのだろう。
- 16 ただしもちろん、手助けのコストが大きく、わざわざ手助けをしてまで意図を実現しようとは思っていないケースはある。
- 17 この条件をブラットマンは「settle condition」と呼ぶ。ただこれは私の語感では日本語に訳しにくいので、星川が同じ条件に与えた名前である「裁量条件」を採用する (星川 2011)。
- 18 ただしブラットマンは (Bratman 2009) では「制御条件」と「裁量条件」を区別していない。
- 19 不幸な事に、共同行為に関する諸理論を分類する際には、「還元主義」「非還元主義」「全体論」「個人主義」「共同主義」「集団主義」などなどの言葉が使われ話は混沌としている。
- 20 本ノートは片岡 (2014) の 1 章に加筆訂正を加えたものである。ここでサーベイされたブラットマンの見解に対する評価は片岡 (2014) の 2 章以下を見よ。

参考文献

- Alanen, L., Heinämaa, S., and Wallgren, T. (eds.) (1997) *Commonality and Particularity in Ethics* (New York: St. Martin's Press)
- Baier, A. (1997) "Doing things with others: The mental commons". in Alamelu, Heinämaa, and Wallgren eds. (1997)
- ブラットマン・M. (1994) 『意図と行為』 門脇俊介・高橋久一郎訳 (産業図書)
- Bratman, M. (1992) "Shared cooperative activity". in his (1999)
- (1993) "Shared intention". in his (1999)
- (1997a) "Shared Intention and Mutual Obligation". in his (1999)
- (1997b) "I intend that we J". in his (1999)
- (1999) *Faces of Intention* (Cambridge: Cambridge University Press)
- (2009) "Shared agency". in Mantzavinos (ed.) (2009)
- 古田徹也 (2010) 「共同行為とは何か——ブラットマンの定義の批判的検討を通して」 『行為論研究』, 2: 1-35
- 星川道人 (2011) 「共同行為を意図することについて」 『行為論研究』, 2: 63-82
- 片岡雅知 (2013) 「共同行為の説明に関する個人主義」 『哲学・科学史論叢』, 15: 85-107
- (2014) 「共同行為とその行為者について」 東京大学総合文化研究科相関基礎科学系修士論文
- 壁谷彰慶 (2007) 「共同行為論と〈われわれ〉」 『哲学の探求』, 30: 41-53
- Mantzavinos, C. (ed.) (2009) *Philosophy of The Social Sciences* (Cambridge University Press)
- Searle, J. (1983) *Intentionality* (Cambridge: Cambridge University Press)
- (1990) "Collective intentions and actions". in his (2002)
- (2002) *Consciousness and Language* (Cambridge University Press)
- Stoutland, F. (1997) "Why are philosophers of action so anti-social?" in Alamelu, Heinämaa, and Wallgren (eds.) (1997)
- Velleman, D. (1997) "How to share an intention" in his (2000)
- (2000) *The Possibility of Practical Reason* (Oxford University Press)